

(学校番号218)

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【内谷中学校】

①	今年度の課題と授業改善策	
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<p><学習上の課題> 昨年度の市学力調査で、学校全体として家庭での学習の時間は確保されているが、基礎的な学習内容の習得状況に二極化が見られる。</p> <p><指導上の課題> 基礎的な知識・技能の力を高めるための反復練習の時間を十分に確保できていない。</p>	⇒ <ul style="list-style-type: none"> ・TPC端末でデジタル教材のドリルパークやスタディサブリ等を積極的に活用し、漢字や英単語、計算など基本的な知識・技能の定着を図る。【単元ごの実施】 ・授業や単元ごとにスクールタッチボードなど生徒が自らの学びを振り返る時間を設定し、次の授業に生かせるようにする。【毎時間～単元ごとの設定】 ・生徒の習得状況に応じて個別に学習計画や支援を行う時間を設定する。【学期に一度の実施】
思考・判断・表現	<p><学習上の課題> 記述式問題や自分で考えて答える問題に対して消極的な生徒が多くみられる。</p> <p><指導上の課題> 答えにたどり着くまでの過程を説明したり、答えを教え合ったりする時間を単元のまとめで学習の成果を発表する機会が十分ではない。</p>	⇒ <ul style="list-style-type: none"> ・各教科の授業において、生徒同士が協働的で主体的・対話的で深い学びの中で思考力・判断力・表現力を高められるように、単元ごとに生徒同士の教え合いや、課題についてグループでの話し合い、クラスやグループでの発表等、協働的な活動の時間を設ける。【単元ごの実施】 ・各教科の課題において、生徒の成果に至る過程をデジタル教材などに記録し評価することで、生徒の粘り強い取り組みや、自ら調整しようとする態度を高める。【単元ごの実施】

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	<p>国語・数学ともに、知識技能のすべての項目において正答率が全国・県平均を上回る結果となった。学習の取り組みでは、学習時間なども全国・県平均を上回っていた。また1・2年生の時の授業でPC・タブレットなどICT機器を活用した授業が実施されており、PC・タブレットなどICT機器を活用した授業に意欲的に取り組んでいる生徒が多いことから、今後も効果的なICTの活用で基本的な知識・技能の定着を図る授業を実践していく。</p>
思考・判断・表現	<p>国語・数学ともに正答率では全国・県平均を大きく上回っていた。国語の話すこと・聞くこと、話すことに関する記述問題では、県の平均を大きく上回っているが、「物語の最後の場面を書き、工夫した表現の効果を説明する」など思考力・判断力・表現力を相互に働かせる記述問題では、正答率、無回答率は県の平均と同等であった。数学では、記述問題の正答率は、県平均を10～15ポイント大きく上回っているが、無回答率は低いとは言えず、記述問題に取り組む意欲が持てない生徒が一定数いると考えられる。生徒は、お互いを認め合い協力しながら課題に取り組む態度が身につけていることから、授業では生徒同士の協働的で主体的・対話的な深い学びにつなげられる授業を実践していく。</p>

③	中間期報告	中間期見直し	
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	<p>1学期にスクールタッチボードなど生徒が自らの学びを振り返る時間の設定は、概ね達成できた。基本的な知識・技能定着のための単元ごとのTPC端末の活用については、教科や個人によって差があり、今後教科会を通して活用促進を進めたい。生徒の学習状況に応じた個別の学習計画や支援は、全体指導は概ねできていたので、支援が必要な生徒への個別対応へつなげていきたい。</p>	<p>教科の特性に合わせ、ドリルパークやスタディサブリなどに代わるデジタル教材なども併せて活用する。</p>
思考・判断・表現	B	<p>記述問題に取り組む意欲を高めるため、生徒同士の教え合いなど協働的な活動の時間を設けることができていたが、単元ごとではなく、半数は1学期中での活動に留まった。生徒の活動の過程をデジタル教材などに記録、評価する取り組みも単元ごとではなく1学期中の取り組みが半数に上ることから、単元ごとでなくとも、計画的に複数回取り組むようにしたい。</p>	<p>生徒同士の教え合いや課題についてグループでの話し合いなど、単元ごとでなく、学期中に複数回計画的に取り組むようにする。</p>

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	<p>知識・技能の観点の問題では、正答率が概ね市平均を上回っていた。1・2年とも国語、社会で大きく上回ったが、1年で数学、2年でも数学と理科でわずかに下回り、課題が見られた。2年の同集団経年比較では、ほとんどの教科で知識・技能の観点の偏差値が昨年より上がっており、改善状況にあるが、生活習慣に関する調査で、「家で自分で計画を立てて勉強している」の質問に対して2年では、肯定的な回答が1年より減少し、市平均と同じ傾向が見られた。忙しい中学校生活の中で学習状況を改善するためにICT機器を活用した効果的な学習で、計画的な基礎学力の定着を図る授業改善の必要性がある。</p>
思考・判断・表現	<p>思考・判断・表現の観点の問題では、正答率が概ね市平均を上回っていた。1・2年とも出題領域ごとの正答率は市平均の傾向と類似しており、2年の数学や社会の歴史領域、理科のエネルギー、粒子、生命に関する領域がわずかに下回るなど特色と関連付けて理解したり、変化の様子を考察するなど基礎的な知識を基に思考する発展問題で課題がみられた。正答率が下がるなど無回答率が増加する傾向もあり、生徒同士の教え合いや活動をデジタル教材などで記録、評価する取り組みなど、協働的かつ主体的・対話的で深い学びの中で、問題に取り組む意欲や思考・判断・表現の力が高められるような授業改善を続けていきたい。</p>

⑤	評価(※)	授業改善策の達成状況
知識・技能	A	<p>教科担当の8割以上が、ドリルパークやスタディサブリをはじめとしたデジタル教材等を積極的に活用することで、学習状況調査において知識・技能の観点の正答率が平均値を上回るなど、基本的な知識・技能の定着がみられた。スクールタッチボードなど生徒が自らの学びを振り返る時間を設定することは、各教科の特性において難しい場面もあったが、口頭やプリントなどでの実施を通して、学んだことを自らの言葉でまとめる力を育成することができた。生徒の習得状況に応じての学習計画や支援においては、テスト計画表の実施など、全体での働きかけを通じ、先を見通した学習をすることができている。今後は、個別最適な学びの実現を目指し、さらに個々へのはたらきかけを中心に行う時間を設定する必要がある。</p>
思考・判断・表現	B	<p>すべての教科において、生徒同士の教え合いや、課題についてグループでの話し合い、クラスやグループでの発表等、協働的な活動の時間を設定した。生徒が主体的に発表活動等を行い、それを相互評価することで、協働的かつ主体的・対話的で深い学びによる思考力・判断力・表現力の向上がみられた。反面、学習状況調査においては正答率が平均値を下回る傾向が見られ、授業で伸ばした力をテストでどのように発揮するかという部分に課題が見られた。また、本年度は、生徒の成果に至る過程をデジタル教材などに記録し評価する機会を十分に確保したとは言えず、その結果、自らの考えを文章で表す能力が伸び切らず、記述問題においては無回答になってしまう生徒の多さにつながっているのではないかと分析できる。</p>

⑥	次年度への課題と授業改善策
知識・技能	<p>ドリルパークやスタディサブリ等のデジタル教材を活用し、既習内容の復習を行うことで基本的な知識・技能の定着を図る。学期ごとに1回以上の課題配信を行う。その際、中学校での既習単元や小学校での学習内容を配信することで、学習した内容を振り返る機会を設ける。本校の研究テーマである「さいたま市小・中一貫教育の推進」を通じて、学びの連続性を活かす指導を充実させていく。</p>
思考・判断・表現	<p>各教科の実態に応じて、ルーブリック等の手段を使い、評価規準を明確に生徒に示し、生徒自身が活動の中で目標を意識できるような工夫をする。また、生徒の取り組みやすい手段で毎時間、授業内容を振り返り、自分の考えたことを表現することで、思考力・判断力・表現力を高めていく。</p>

※評価
 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)